

# 企画展「戦いの記憶」 釈文

※「は改行位置を、へ」は割書を、へ」内の  
／はへ」内の改行をあらわします。

## 12 宇佐美駿河守定行三代父子勲覚書

(軍学者宇佐美定祐文書)

一天文廿三年六月、政虎一万三千にて信州「川中島へ出張仕候而、赤坂山に陣取、屋代」土倉辺を放火仕り候、武田晴信「原ノ町」三陣取被申候、六月十日二信玄「夫を越、虚」空蔵山城へ取詰候間、廿一戦可有候へ、後より「八押詰可被成候と断り候て、葛尾・土倉・坂木」より鼠宿迄焼働仕候、此所一方口にて跡より「武田殿御推詰候へ而へ、一人ものかれざる谷」際にて候、是「働入候へ、信玄定而推かけ可被」申候間、これにて返し、勝負可仕候て、今日の働へ」跡か先にて候、今被申宇佐美駿河守定行・村「上義清・松木内匠三備を跡に立、信玄を」待かけ候へ共、信玄少も不被構候故、毛利上総「介、斎藤下野并長尾越前守政景を遣し、「五明力石迄焼働仕、瀧の寺迄勢を打入申候、「駿河守定行へ福島筋取出二ツ攻取、飯山へかゝり引取申候、

一同八月十五日二謙信一万余ニテ川中島へ働出候、「信玄も貝津城に被居候、同月十八日二信玄二」万余にて筑麻川を越懸り候、謙信「原の町」を前に当、立備、卯の上刻より、未の下刻「迄懸ツ返ツ十七度の合戦、信玄旗本」と謙信旗本と合戦、謙信旗本敗軍「す」と申せども、取て返し信玄旗本を「追返し」御幣川へ追浸、川中にて信玄と謙信と直二太刀打、「謙信追付、信玄を二太刀迄切付申候、土口山へ」追詰、甲州衆式千余打取申候、信玄弟武田左馬助「信繁をバ謙信直に打取申候、此日十一度へ」謙信勝軍、六度へ信玄の勝也、其夜信玄「へ貝津へ引退被申候、次の日謙信へ引退、善」光寺二かゝり引取申候、武田衆三千

式百余打」取候、此時宇佐美駿河守へ大塚村二備を立、信玄「旗本へ横鎧を入、突崩申候、輝虎感状御座候、「駿河守と渡辺越中守翔が手にて横を入」候故、上杉方大勝二成申候、令承及候、駿河守「家来亀岡但馬、塚田伝十郎、戸股主膳先」懸仕り、手柄高名仕候、謙信感状于今所持仕候、

## 13 上杉謙信感状(軍学者宇佐美定祐文書)

態申入候、先月廿五日夜、取渡筑「川武田本陣を攻破候刻、其方」以手勢一番合戦被致、頸数二百余、「殊一条六郎を討取、信玄敗北いたし候」段、感覺候、翌日重而企合戦、終日「七度之懸合、定行毎度信玄軍ヲ」推破、謁粉骨所、是又無比類手柄三「存候、委細竹俣右衛門尉春倫可申候也、

弘治二年う月十六日 政虎(花押)  
宇佐美駿河守殿

## 14 根来左衛門佐由緒書

覚

一 父勢祐儀、紀伊国根三罷居候「時へ根来岩室坊と申候、寺数」三千坊之内廿三人旗親定、勢祐「伯父勢伝二付従、西山と云所二」一城「構罷居候、勢祐儀勢伝跡取仕」立、一所罷居候事、旗親名付者「控御座候、

一 根来寺之儀、太閤様不属旗下一「付、西山へ被向御馬付遂一戦、高野へ」引取申候事、

一 御当家江勢祐御奉公仕候事、「庚子ノ歳関ヶ原御陣之砌、福原」越後守殿、榎本伊豆守殿へ御奉二而」御味方可仕候旨、被仰下候二付、則御請「仕、都合千三百三拾五人召連罷」出候、森江張番被仰付、阿曾沼「丹後守殿為御目付被指出、兩人」同所二罷居候処二、福原越後守殿、「榎本伊豆守殿為御使者被仰」下候へ、伊井侍従殿へ「三万石三而可」被遣之通、御約束被成候間、牢人分二而」可参之通、被成御固候へとも、勢祐「申上候へ、一旦御味方仕御奉公候へ、二

君二仕候儀毛頭存寄も無御「座候条、宗端様へ御奉公可」申上候通申切、御国御供仕罷下候「事、

一 紀伊大納言様より安藤帯刀殿へ御「奉二而伊勢与太夫・岩崎主水と申」者を以、被仰下候へ、岩室へ歸寺仕候へ、老万五千石可被下候旨内証を以「被仰越候と、榎本伊豆守殿を以、則」言上■仕候事、

一 根来寺之儀、勢祐存生之砌、紀州様「御家頼二居申候普門院と申者二」寺預ヶ置候処二、普門院死去仕候而「以後根来新一郎・左京兩人二而寺」預り居申候処二、里二罷居候勢祐末「家之者共申処二、根来寺之儀へ勢祐」存生之砌、普門院へ預ヶ置申候条「可指返候由申懸候二付、根来新一郎」方より爰元へ飛脚を以申越、根来「寺之儀里三罷居候原本村之衆中」より寺指返可申候由候、如何可仕哉と「申越候二付、□隠岐殿を以御老中様二」御内談仕候へ、此方より掠申二及申「間敷候条、紀州様御老中仰次」第可然と被仰候二付、其趣根来新一郎「方へ申遣候へ相方より右之趣」大納言様へ老中迄申候へ根来「寺之儀へ長門二罷居候勢祐世倅」根来左衛門佐次第二可仕之通被仰出「御座候二付、去々年御入国之御供」仕罷上候通、紀州里之者共承及、「兩人大坂へ罷出候、其外之者共ハ書状」を以右之趣申越候、私儀先年より「之寺法不存儀二付、高野安養院」と談合仕候へ、里之者共申出、寺「法之条、彼者共へ寺請取を可然之由」被申候二付、其段申遣、紀州末家之「者共寺請取を相済申候条、根来」一山之者共へ預ヶ置申候事、已上、

十月廿日 根来左衛門佐

紀伊国那賀郡岩出庄茨本邑  
田中甚五大夫橋祐秀  
楠正成之孫楠正儀以軍功大和・河内・和泉・紀伊「四ヶ国吉野内理奉成供御所候事、正儀者」紀州龍門山最初力峰二楯籠、龍門之麓「田中庄ノ近辺」知行罷在候処、吉野宮方・京都就御和陸「天下」一同二將軍

家江帰シ、正儀次第身躰劣へ、河州江曳込候節、倅正祐二歳龍門之麓、田中庄ニ捨置候処、成人之後、茨本江引越、右、田中ヲ領知候、子細ニ而シテ田中ト改替、代々、茨本ニ致住居候也、

一根来岩室坊・泉識坊・杉之坊・赤井房、根来「八旗頭ニ而有之、就中岩室坊武勇、諸国無」隱候、田中ノ家より惣領ヲ遣、代々岩室坊致「住持、次男田中ヲ継来候、天文年中田中庄」井坂邑末ノ宮ト申神社岩室坊兼々「信仰ニ付、致建立棟札社頭ニ在之候、

### 15 根来藤五大夫橘重定由緒書（栗栖家文書）

敏達天皇四世孫井手左大臣橘朝臣「諸兄公之雖為後胤、降民間ニ而春」秋久矣、于爰某祖父根来藤五大夫「橘重定者」生国紀州名草郡鳴神村之地侍也、「屋敷地」三十間ニ六十間、四方土居藪畠宜也「幕」之紋輪室小紋橘之領伝来劔戟書「軸等雖有之紛失、或散在ス、焼失」之物々不遑量焉、漸ク二尺五寸古「備前之太刀九寸ノ則重卿ノ鎧」通相残于今所持ス焉而、已重定勢「形六尺余刀量勝他鉄砲ノ秘術習」練之宗旨代々浄土真宗也、

一元来藤五大夫者、根来寺之大衆橋本坊ノ「為実弟、因茲彼坊舎并觀徳院右」坊自吾家繼之故ニ、乱世之砌ハ、彼衆ニ与メ携弓箭及度々ニ而軍功有之云々、「天正十年ニ信長公高野山責玉フ時、根来」愛染院同徒弟藤五太夫御味方仕り、「当国瀬之山合戦」二人押軍ニ高名ス、依之「高野表之大将小田左兵衛佐殿被達」上聞ニ則信長公御感状并槍ヲ拜領ス、一同十二年信長公之御次君对信雄公ニ「羽柴秀吉叛逆故、信雄公ヨリ家康公江」御加勢御頼被遊ト云々、然処ニ根来寺「并紀州口郡地侍ノ者トモ」御味方頼被「為思召之条可致出勢旨、井上賀兵衛殿」御使者ニテ公ヨリ一通之御書被成下「訖、於于爰祖父根来藤五大夫外祖高木」若大夫ト土橋平次ニ申合在々ニテ筋目「有之者三十六人御味方可仕ト致連判」御請申上、天正十二年三月十八日雜兵「及二万ニ出勢泉

州堺之政所追払、摂州「今宮迄働也、此由秀吉御聞、小牧表之」御出馬三日相延ト云ヘリ、依之岸和田城「秀吉ノ諸將黒田筑前守、蜂須賀阿波守、」生駒讚岐守、赤松下野守、明石与四郎、「中村孫平次并城代寺田其兵衛、七頭籠テ紀兵ヲ押ル味方三備二行軍ス、」中備二敵ヨリ突掛ル於于爰ニ挑戦フ事「夥シ、祖父藤五大夫外祖高木氏下」知シテ抽軍ニ高名ス、諸兵入乱突「立々入交リ祖父（兄）根来用大夫鉄砲」以テ騎兵多打落シ敵之馬ヲ分捕ス、「弟根来源四郎討死ス、敵ヲ数多打」捕味方七百余討タル也、「

一根来之大衆泉識坊・杉之坊・愛染院・橋本坊・杉本坊・岩室坊・乘心院、惣分ノ「衆徒ト申合、当国勢一手ニナリ、」家康公之致御味方申ス、依遣限二天正「十三年酉ノ三月秀吉根来寺」發向、廿一日根来寺兵火、此砌根来ノ大衆并二紀ノ地侍鉄砲二名ヲ得シ若者トモ撰「勝テ、泉州岸和田表仙石堀、次積善寺」所々ノ砦ニ楯籠リ、祖父根来氏諸兵「ヲ勇メ下知ヲ成シ、屢行馬ノ勞ヲ流ス」ナリ、雖然秀吉大軍ナレハ、不軍智「謀勇力ニ紀兵破畢ス、

一于爰根来衆繫ノ城太田村ノ砦ニ殘党「数輩楯籠ル、秀吉大軍ヲ以テ大田ノ」城外数百町ニ堤ヲ築キ、紀ノ川水ヲ「セキ入テ責ナリ、堤普請十日ニ及」一度堤大キニ切レテ敵軍勞ス、然ト云トモ「詮ナシ、今ハ根来寺」ノ義戦モ是迄「也ト蜂須賀小六殿ヲ以テ和ヲ請ク、然ル」上ハ甲兵三十余人ノ頸ヲ可出ス旨ニ極ルト云ヘトモ、其迄ニ不及トノ嚶ヲ以雑兵ノ「印ヲ渡シテ事調ルト祖父云伝フ、

一此後、根来愛染院遠州浜松へ罷下、「以井伊兵部殿、右之武功トモ演説ス、則」家康公江被為達御耳ニ処ニ、御感「之上知行千石被下置之也、其後」祖父ノ兄根来橋本坊浜松へ罷下「泉州表之忠功以成瀬吉右衛門殿、」日下部兵右衛門殿兩人ニ被為達「御聞ニ之処、被為聞召届、是」又知行五百石被下置之ヲ、橋本坊「其後浜松ニテ病死ス、祖父藤五大夫」其後備前中納言殿より右ノ以武勇ヲ「領知千石可給ト申来

リ、彼地へ參ル」支度仕候処ニ桑山法印殿ニ被押「留、当分隨其義ニ令延引也、」愛染院名跡ハ根来平左衛門ト申ナリ、「御旗本ニテ千石被下置之罷有候、」外祖紀姓栗栖犬楠丸国実嫡孫「高木若大夫紀浄貞者」、生国紀州名草郡栗栖村之地侍也「屋敷地方六十間四方、土居藪畠也、」幕紋和室小紋葛葉家珍正宗脇「差国宗刀諸軸等雖有之散在或ハ」紛失ス、先ニ云伝ル所ヲ記之得馬ニ乗ル事宗門代々浄土宗、

元祖栗栖犬楠丸（後号ノ六郎ト）者足利家「侍ニテ代々栗栖ニ住館也、尊氏公」之味方依テ軍功ニ則名草郡岡崎「栗栖・加納・狐島・安原郷、那賀郡池田ノ」庄内豊田村、右伝来之地ナリ、足利「之御判物并御教書雖有之、家及」廢未紛失之

#### 他国之親類覽

- 御旗本 根来愛染院 知行千石
- 松平陸奥守殿御家根来新蔵 知行六百石
- 同御家 佐伯与右衛門 知行七百石
- 同御家 塩沢半兵衛 知行式百石
- 小出大和守殿御家有本兵庫 知行五百石

#### 覽

貞享元年キノヘ子四月御触ニ「大御所様之御勘状并御朱印、其外」慥成ル申伝有之候ハ、江戸從 公儀「御尋被為遊候間、書付候而差上之」可申旨、町御奉行大須賀五六左衛門殿、「芝田才右衛門殿、被仰渡候」ニ付、小牧御「陣之砌、御味方ニ罷出候祖父荒増書」付差上申候而、御留置被成候、已上、

貞享元年（甲ノ子）四月 根来重左衛門「橋重貞記

### 16 小山家系図（久木小山家文書）

系

内大臣淡海公 七代後胤胤胤  
元祖 村雄 国司 從五位上 武藏守  
秀郷（前陸奥守鎮守府將軍、從四位上、若名俵藤太

／藤原朝臣

(中略)

秀朝 下野判官 若名五郎左衛門

元弘南方政罰ノ時、一族千人其勢三百人上路、鎌

倉執権高時ノ下知

忠実法眼入道 紀伊国 住古座

經幸 小山石見守

領知(紀州熊野ノ三箇庄 賢(舎))

田庄ノ伊熊庄 紀伊国熊野也)

天福元年九月十二日三ヶ庄久木村来ル、正和二年

十一月廿七日領主「末重入道讓証文、元亨四年四

月二十七日阿波国預所」肥後守經家請文

此時紀伊・和泉・淡路・阿波 四州海賊成敗司

兼光 若名小山八郎

左衛門尉(領知右三庄ノ阿波ノ国立江庄)

延文五年(五月七日ノ六月一日) 畠山尾張守義深

ヨリ軍功感状、天授五年八月九日 南朝論旨公宣

所持「康暦二年二月七日 細川阿波守正氏書札

行近 若名小山八郎

右京亮(領知右同断ノ加増知印南本郷)

応永六年十一月十五日 畠山尾張守基国書札」応

永二十年 此朝論旨

家長 若名小山八郎 左衛門尉 (領知右同断ノ加

増鮎河村)

応永二十五年十月廿九日 管領尾張守滿家書札」

同執事家人書札

家次 小山九郎 隼人亮(領知右同断ノ加増三栖・

安宅)

尾張守從三位持国入道徳本奉書数通、永享十年」

五月多武峰於搦手軍功感状数通

長次 小山八郎 (領知右断ノ加増切目・西ノ地)

康正二年十一月廿八日、長祿元年二月十日、畠山

政長奉書、同伊予守義就書札、同執事等書札数通

也

春次 小山八郎 左衛門尉 領知右同断 畠山尾張守植長奉書、執事丹下・遊佐等書札

俊次 小山三郎五郎(式部太輔ノ豊前守) 領知(同

断ノ加増広庄・田殿庄)

尾張守植長隋仕奉書、執事遊佐・丹下・長修理亮

等」書札、湯川式部太輔春長、同右馬亮弘春神文

小山長八郎 津之介 領知広庄

天文二十年八月晦日 畠山長光書札

右津ノ介、湯川家為猶子、日高郡富安庄小松原住」

湯川一族小山家来ル、兩家和睦也、

小山善十郎 島之助 領知田殿庄

右島之介、湯川家微勢ニ成砌、三州加島住

定次 小山弥八郎 石見守 領知右同断

畠山尚慶書札数通也、執事遊佐左衛門太輔状数通

有」同丹下氏状アリ」

舍弟 小山民部功戰感状

氏次 式部太輔 領知三ヶ庄耳

豊臣秀吉公 折紙朱印并片桐市正・増田右衛門尉

・山中山城守・木村常陸守等状数通

氏定 小山次郎左衛門尉 実 式部舍弟

大坂籠城 被官打死 自分象疵在所江引籠

氏辰 小山八郎右衛門尉 牢人

浅野左衛門佐 寄子ト

「法名ノ松岳常林居士(寛永十七壬辰ノ三月廿日

忌日)」

氏辰 小山八太夫 地士

安藤帯刀 寄子ト

「法名ノ実岩宗貞居士(寛文八申年ノ三月五日忌

日)」

定義 小山八郎右衛門尉 地士

「法名ノ義海性源居士(正徳三巳年ノ二月十日忌

日)」

17 畠山義夏(義就)書状(久木小山家文書)

去十日、切目出陣候」由注進候、弥被致忠」節候者、可

令悦喜候、委細愛洲民部少輔」可申候、謹言、

十一月廿日 義夏(花押)

小山八郎殿

18 畠山卜山(尚順)書状(久木小山家文書)

就蛇喰之敵没落」其口之儀、成意懸」頭式 討捕到来

候、「尤神妙候、弥彼牢」人等成敗之儀、併可」為忠節

候、猶」野辺可申候、謹言

七月十四日 卜山(花押)

小山弥八殿

19 畠山尚慶(尚順)書状(久木小山家文書)

安宅南要害敵取懸」及難儀候由、注進到来候、「早速

致合力可抽忠節事」肝要候、此刻於無沙汰者、「連々

申事不可有其曲候、「併粉骨憑入候、委細遊佐」勘解

由左衛門尉、猶長少将可」申候、謹言、

七月廿四日 尚慶(花押)

小山弥八殿

20 橋口家由緒書(橋口家文書)

享徳三年甲戌四月六日 橋口隼人正

高来印殿前河州太守清翁玄大夫居士生年八十八、嘉

吉二年赤松丹信其外数多討取上杉左衛門卜高野山」

蓮華谷ニテ討死ス

明応八年己未九月廿一日 橋口隼人

調来院殿高納太守金藤西光居士生年六十八、応仁元

年阿波太膳以上五十六人西院札場ニテ討取、其外在々

ニテ手柄」

弘治元年乙卯二月四日 畠山掃部

三代院殿備行国主蓮門道喜居士生年六十一、備後ノ

神石ニテ川根新八其外数多討取、

天正九年辛巳二月八日 橋口甚太郎

浄円禅定門 生年廿二歳、安楽川陣之時殿村ニテ田中

弥右衛門卜討死ス、弥右衛門甚太郎ガ太刀ヲ取卜故不

有手柄」

寛永貳年乙酉三月 橋口隼之進

惣分院殿乱納太在守惣為隼堅居士生年七十二歳、天

正拾年二信長公高野山工討手ヲ被向責掛申時「橋口隼之進高野山之總大將仕、高野山之惣旗地淺黄二則金剛峯寺之書附裾二■尾附申候ヲ先年より」橋口隼之進二右之旗代々渡シ置、旗下之役人南谷順玄坊、山東大河内彦六信長公之討手之太將「近藤藏人・細川丹右衛門・竹田藤内・大木權太夫・村川与右衛門・井口喜平太・島伝五郎、其外甲頸以上三三十六人」橋口隼之進討取、同高野山方二彼此甲首以上六百七十三人討取、生捕式十八人、又高野山方二六十八人討死ス、「手負百十三人討モ被討モ電光朝露今年橋口隼之進三廻忌三依相当二、金剛峯寺惣僧衆中」於窪之坊二為吊不殘如件、

〔印〕

東岸大野村 小田原宿坊  
寛永四丁卯三月廿一日 橋口又右衛門殿 窪之坊

## 22 高井家系譜（高井家文書）

〔系譜〕

小十人小普請

高井保太郎

系譜

藤原姓高井氏（家紋丸二左藤／替紋三ツ瓶子）

先祖（本国信濃／生国大和） 和田次郎惟久

鎮守府將軍秀郷之四男千常「七代之孫和田次郎惟久信州高井郡二居住仕、高井兵衛尉与相改申候、生国大和 高井新右衛門直時

一筒井順慶二奉公仕、同国窪田村与申所「知行仕罷在候由二御座候、惟久より」新右衛門迄之儀、記録無御座候付、相知レ不申候、

直時倅生国大和 高井弥左衛門直行

一父新右衛門同様、筒井家二罷在候処、「牢人仕、御国江罷越、根来坂本二居住仕候処、天正十三年根来放火」之節、先祖より伝来之物并記録等悉ク「焼失仕候、

（中略）

高井保太郎「亥二十一歳」〔印〕

嘉永四亥年正月 義時（花押）

## 23 津秦郷天神之縁起

（前略）

〔天神帰本殿記〕

「第一百七代 正親町院御宇天正十三季三」□豊臣秀吉発向于当国困大田城而不克故、四墨「築塘湛水攻撃之時、悉破却国中之宮社、同没収其神領、此時当社罹于兵燹之余炎、成于烏有矣、当郷人未然恐有、此变窃出神像負之以隱于山中、去寇」□退散之後、人皆還郷而、雖欲納神像於社内、無如」□而已故、先雖建小祠、難納神体、依之郷人更預之」近歳有村長善右衛門者、渠之預時、郷人之老者死亡」若季者未知彼社之神体、渠亦不欲高大彼社而、奉「納神像、却如己一人之宝、是故神呪廻難成靈告未」知其所以然猶亦不能返納之渠死去其子善三郎」□後其妻持彼像而歸于弟内田太郎助之家助末」知彼像之来由、又如我之財也、因茲神怒未止多凶」事於是其母妙意謂于弟、又十郎曰、那天神入来以」後不有吉事、欲遣于人、即曰成崇之天神有誰望之」哉、歸于我郷、偶然而語于神前中務重良々曰人皆」依崇敬不可而逢于神崇、汝戴其像来我能可奉貴」重之於是即持彼天神来以授于重良々受之奉拜」見之、其覺神顔銘于肝而高貴也、大歡悅而不移時」日、上于京師儼飾表具奉尊信不可勝計焉、余一日」到于重良亭之時、詣于彼小祠退出之刻、堀内甚左」衛門正利語彼像之転伝於余々曰、我始聞此事、然」則重良奉返納彼像於本社、則可然而已、正利曰、重」良不晦于物理之仁也、必可語之、余諾之、入于重良」亭床掛詩歌、余祖父之筆也、則語于重良曰、此詩歌」我能知之、重良曰、然也、為賞足下掛之余曰喜其懇」意不淺雖多余祖父之筆、無有」于此之者也、必不」可見于若士等而誇之、良曰、我常成其思耳於是良」亦語曰、我有天神之像持之、久可奉見之、余聞、只

今「正利詳語其像之来歴転伝之儀、曰重良奉返納于」本社則当可歟、必欲奉拜之於是良掛彼像於詩歌」之上、余謹以再拜奉誦中臣祓而退之、良亦謂、余曰、「誠聞此天神之縁起有于貴家然否、余曰、唯々不思」議今持參之可讀之否、良曰、此則機感相応啐啄同」時之儀也、其奇異難測而已、必欲奉聞之、余曰、璞以」算而出劍自雷而顛物之顛晦覺各固有時所遇之人」亦同之、一物且然況於靈神之像縁起等乎、則命于」正利出於挾箱中講談之畢、於是重良曰、反于季来」之所聞而委細也、殊勝也、然上那天神所奉渡与于」貴公也、余曰、雖可辞所預受也、雖然不再興彼社而」高大之則難納于今之小祠也、必約以奉加而再興」之語于村田六左衛門長治曰、早認帳治曰、今日先」可有閑談帳撰吉日可調之、是故閑話而未知夕陽」之煙没依傍人之告訴而、愕然而辞之捲彼像而懷」之帰来矣、是後調帳余先奉加而後遣于重良方則」与余均也、并遣于村中次津秦郷分々加其芳志者」也、其後神宮庄中之村長等有集于当家之時、余語」上件之旨趣、請奉加人々皆諾而、後遣帳、則各々奉」加畢、於是積杉檜之良材雇上工之梓匠経之榮之」其功不日而高大之本殿新成（四月五日召居巧匠／潤六月二十一日地）（曳同二十七日／礎居柱立棟上）／七月九日寅卯／刻槌打」矣、依之今晚丑時所奉遷幸彼神像」於此清新之本殿也、然則人々再興」之微志大有勝于秀吉之所行者也、夫天神経八十」有余歳之間、不得還幸于本殿愁苦無窮歟、而今幸」有得時而安座于此高大之新本殿中則何之嘉慶」如之乎、何之日忘之哉、然則感応神前中務重良同」神宮庄中之諸奉加人当郷人再興之志令得寿命」無 福祿之三寶矣、仍如件、

（中略）

寛文十二（壬／子）年七月十六日

紀伊国造第六十九代

刑部少輔從五位下紀朝臣昌長（花押）

## スポット展示「家の由緒書を読む」釈文

※「は改行位置を、へ」は割書を、へ」内の／はへ」内の改行をあらわします。

### 1 加納家系図（紀伊藩士加納大隅守家文書）

新田大炊介源義重之四男新田蔵人「義季（又徳川四郎／ト称ス）八世之御廟裔」松平参河守泰親君「初太郎左衛門／ト称ス」之六「男松平備中守久親末葉」

久直

松平孫大夫源久直生国参州先祖以「来世々参河国加茂郡加納邑之住士ニテ」御当家御一族ナルヲ以テ御代々奉仕ス、「然ルニ久直ハ広忠君御逝去後」御長男竹千代君（神君／ナリ）ハ御幼稚ニテ「尾州ニ御在住之頃、参河国広瀬・高橋両城之主三宅右衛門大夫之幕下」加茂郡寺部之城主鈴木日向守重教「ニ属ス、其後神君駿府御在住ニテ西」参河ハ大半織田家ニ属セシ時、矢作・足助「之両鈴木覚、皆織田信長ニ従フ時ニ永」禄元戊午年神君ハ今川義元之下知ヲ「受給フテ、西三河之信長ハ属スル城々ヲ」責給フ、初二加茂郡寺部之城ヲ攻給フ「処、堅クシテ城ハ陥ス、同三庚申年今川」義元尾州桶狭間ニテ討死後、神君「広瀬・高橋之両城ヲ攻給ヒ、城主三宅」右衛門大夫ハ服部市平保俊カ従士雪「岡久右衛門カ為ニ討死シテ落城ス、依テ」三宅ニ属セシ西参河之地士七十余人ヲ「赦シ給フテ、高橋衆ト称シテ本多作左衛門」門重次ニ御預ニテ与力トナシ給フ、是多ク「ハ鈴木覚ナリ、此時久直モ本多重次之」組トナル、依テ松平之御称号ヲ憚テ家号「ヲ加納ト称シ、性ヲ藤原ト改ル、天正十八庚子」年小田原之北條家滅亡後ニ、神君関「東へ御入国之時、本多重次ニ上総国小」井戸三千石ヲ賜フ、此時孫大夫モ上総「国ニ移知行式百石ヲ賜フ、慶長年中」ニ関東ニ於テ卒ス、年月不詳、

（以下略）

### 2 加納信員軍忠状写（紀伊藩士加納大隅守家文書）

小笠原兵庫助政長代加納四郎太郎信員・同六郎「助延申軍忠事」

右於去九月十八日美濃国揖斐野合戦致先懸「軍忠畢、同十月五日追落糟河山池戸之城郭、」同六日責登瀧尾至鎌倉山之峯、為先陣打落「所々、御敵焼払矢倉陣屋畢、同廿日於木戸」之尾致合戦之処、被疵信員家人助次郎畢、「同廿五日責入池戸焼払下狩宇・上狩宇ニケ所之」城郭、助延分捕堀部太郎兵衛尉畢、将又自「九月十五日至十月廿六日令勤仕昼夜所々之」役所者也、「御見知分明上者、為後証可賜御判候哉、恐惶謹言、

建武四年十月廿六日 大江信員判

御奉行所

承り花押

### 3 覚（紀伊藩士中村家文書）

覚

一 信長殿尾張ニ御座候時分「多氣之御所扱之上三而」御立のき之由彦祖父・祖父などの名も不存、私親「者中村三郎右衛門と申候、お」ち花崎与三左衛門所「養子ニ罷成、拾壹歳ニ而在所ヲ罷出」候得者、諸親類之分ち不存候、

一 拙者彦祖父より多氣之御「所ニ奉公申候、多氣之御所くつ」れの時分、伊賀通甲賀へ参「黒川殿ニ懸り罷在候由、甲賀」侍竹林常杏、池田遊林など、「申仁、拙者せかれの時分、右之様子」申年寄たる諸親類無之「故二分ちハ不存候、

一 遠州ニ而母方之諸親類ハ「小笠原長衛門、武藤万休、川合」形部、江間与右衛門、江戸ニテハ「加々爪殿なと親類の由、万休」申聞候、紀州御入国二年「以前ニ駿河ニ而御奉公ニ罷出候」得共、于今親類之名のり「不仕候

不渡

### 4 系譜書（海部郡大引浦寺井家文書）

「先祖書控

寺井栄次」

一 先祖 寺井式部

織田信長公之御代、頭如上人之「当国江罷越候節より御国ニ住居」仕候、

一 二代 同 源七

一 三代 同 仁左衛門

当浦庄屋役相勤申候

南龍院様網代浦 御殿江被為「成候節、当浦ニ而御猪狩等被為」遊候節、御目通り被罷出拝領物仕「御座候、」清溪院様海鹿島江被為「成候節、」御目通り被罷出拝領物仕御座候、「其節同島江海鹿遊石期節之外、海鹿島」近海凡十四五丁四方当浦江漁場として「末世迄御免し被下浦中一統悦び居候、先年之由緒書等も御座候処、大火之」節焼失仕無御座候、

一 四代 同 十郎兵衛

同役相勤申候、

（以下略）